

# 第1章 調査結果

---

1. はじめに  
昭和女子大学教授 緑川日出子 …………… 16
  2. 生徒調査の結果  
東京外国語大学専任講師 長沼 君主 …………… 22
  3. 教員調査の結果  
昭和女子大学教授 緑川日出子 …………… 36
-

# ① はじめに

昭和女子大学教授 緑川日出子

## 1) 研究の背景

「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」（以降「東アジア調査2006」）では、日本の高等学校10校の1、2年生の生徒3,700人と韓国的高等学校5校の同学年の生徒4,019人を対象として、両国の高校生の英語力と英語学習の実態を英語コミュニケーションテスト（GTEC for STUDENTS）とアンケートによって調べた。その目的は、英語学習とその成果に関する共通点と相違点を明らかにして、日本の英語教育改善への示唆を得ようというものであった。筆者は「東アジア調査2006」の『『英語力』と『日常の英語使用に関する意識』の比較研究（日本・韓国）」（2008）の中で、次の2点を明らかにした\*1。

その第一点は英語力に関するもので、韓国の高校生のリーディング力とリスニング力は、日本の高校生のそれに比べてはるかに優れていたこと、しかしライティング力については、日本の高校生がより優れていたということである。少し詳しく述べると、リーディング力は、韓国では調査対象者の56.1%がグレード5以上に到達していたが、これに相当する日本の調査対象者は僅かに17.5%であった\*2。韓国の高校生のリスニング力はリーディング力ほど高くはないが、それでもほぼ40%に近い生徒がグレード5以上に到達しており、日本人の約19%を大きく上回っていた。一方、ライティング力については、日韓共にグレード5に属する生徒は皆無に等しいが、グレード4に達していた生徒の割合は、日本では調査対象者の34.2%、韓国では僅か12.2%という状況であった。韓国の高校生は、ライティング力は日本よりかなり低いが、リーディング力とリスニング力は日本の高校生に比べてかなり高いという結果を得て、筆者はその理由を、韓国における小学校英語教育の実績と中・高等学校の教科書で取り扱われる英語の総語数の絶対量が多いことから（緑川、2008）授業における英語学習量が多いであろう、また、ライティング能力については、英文を書くことを課していない大学修学能力試験の影響によるものではないかと推論した。

\*1 「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」結果サマリーはp.6参照。また、『東アジア高校英語教育GTEC調査2006 報告書（改訂版）』は、<http://benesse.jp/berd/data/>で閲覧可能。

\*2 GTEC for STUDENTSのスコア・グレードの詳細は、資料編p.78参照。

第二点は、両国の高校生の日常の英語使用経験についてのアンケートによる結果分析で、「英語で書かれた説明書を読む」から「英語での天気予報を聞く」まで、10項目の英語使用経験率が、韓国の高校生が日本の高校生に比べてすべての項目で非常に高いということがわかった。例えば「英語で書かれた説明書を読んだことがある」生徒は、韓国では約78%、日本では32.0%、「英語での天気予報を聞いたことがある」生徒は、韓国では約54%、日本では約9%、「英語で道を尋ねられて答えたことがある」生徒は、韓国では約77%、日本では約25%というもので、この差が何によるものであるかについては、アンケートのみでは手がかりが掴めなかった。しかし、韓国の国家戦略としての英語教育や、既に定着している小学校英語等は広く知られるところであり、そこから「これまでの経験」を問うたアンケート調査の結果にその影響が表れたのではないかと推察した。

「東アジア調査2006」二次調査（以降「二次調査」）では、「東アジア調査2006」の結果から、韓国の高校生が日本の高校生と特に異なる傾向を示した上記2点に注目し、それらの理由を知るために韓国に出向いてより正確な情報を収集して、日本の英語教育改善へのさらなる示唆を得ようと考えた。そのために、2006年の調査対象校を対象として、調査に参加してくれた調査対象と同学年の生徒への学習実態聞き取り調査と、その対象者が属する高校の英語担当教員に英語の指導に関する聞き取り調査を行った。この調査の日本側調査団には長沼（調査時には清泉女子大学専任講師。現在、東京外国語大学専任講師）と筆者が加わり、長沼が高校生のグループ・インタビューを、筆者が教員のインタビューを担当した。本稿執筆に当たり、内容の重複を避けるために、高校生のグループ・インタビューのまとめを長沼が、教員インタビューを含む全体のまとめを筆者が担当した。

## 2) 研究の目的

本研究では、「東アジア調査2006」で韓国の高校生が日本の高校生と大きく異なった2点についてその理由を探ることを狙いとして、次の2つの質問を用意した。

1. 韓国の高校生のリーディングとリスニングの能力（GTEC for STUDENTSによる）が、ほぼ同年齢の日本の高校生に比べて非常に高いのはなぜか。
2. 韓国の高校生の日常の英語使用経験率（アンケート結果による）が日本の高校生に比べて非常に高いのはなぜか。

## 第1章 調査結果

## 3) 研究の方法

## ①調査対象

二次調査では、「東アジア調査2006」の韓国側の調査対象校5校の中から、次の条件を満たす4校を選ぶことにした。

- ・ソウル市内および近郊に学校があること
- ・校内で平均的な学力の生徒5名が研究者とのグループ・インタビューに参加できること
- ・英語科の主任クラスの教員が学校を代表して研究者とのインタビューに応じてくれること
- ・インタビューの後にインタビュー内容を補足するためのアンケートの回答に応じてくれること

上記の条件を満たす4校と同校の該当調査対象の生徒・教員を決定した\*3。なお、調査対象校の抽出に当たっては、本研究の韓国側研究者ソウル大学校・権五良教授の協力を得た。

以下は、調査対象に関する基本的データである（表1-1、表1-2）。

表1-1 調査対象生徒

	A校					B校				
	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e
性別	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子
現在の校外英語学習	なし	なし	在宅教材、学習塾	なし	学習塾	学習塾	学習塾	在宅教材、学習塾	学習塾	学習塾
英語圏への渡航経験	なし	なし	なし	なし	なし	旅行あり	旅行あり	なし	なし	なし

	C校					D校				
	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e
性別	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子
現在の校外英語学習	家庭教師	なし	在宅教材、学習塾	在宅教材、学習塾	在宅教材	学習塾	在宅教材、学習塾、英語キャンプ	学習塾	学習塾	学習塾
英語圏への渡航経験	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	ホームステイ、留学あり	あり	旅行、ホームステイ、留学あり

表1-2 調査対象教員

	A校	B校	C校	D校
性別	男性	女性	男性	女性
英語教員歴	10年	16年	17.5年	13年
同校での在職歴	10年	16年	4年	13年

\*3 調査対象校の概要は、資料編p.64参照。

## ②調査内容

インタビューとアンケート調査で取り上げた調査内容を表の形で以下に示した（表1-3）。

表1-3 調査内容

		調査内容
生徒	①生徒インタビュー調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語使用経験</li> <li>・英語に対する意識</li> <li>・学校外での英語学習</li> <li>・これまでの英語学習</li> </ul>
	②生徒アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・就学前の英語学習経験</li> <li>・小学生時の英語学習経験</li> <li>・中学生時の英語学習経験</li> <li>・現在の英語学習</li> <li>・英語圏への渡航経験</li> <li>・日常生活での英語使用経験</li> <li>・資格試験</li> </ul>
教員	③教員インタビュー調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校での英語教育（授業の内容、授業以外の取り組み、入試の影響など）</li> <li>・生徒の英語使用経験</li> <li>・生徒のこれまでの英語学習</li> </ul>
	④教員アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校での英語教育（カリキュラム、自学設備・施設、シラバス、校内研修など）</li> <li>・生徒につけさせたい英語力</li> </ul>

## ③データ収集の方法

### A. インタビューによるデータ収集の方法

- ・生徒に対するグループ・インタビュー

調査対象生徒については5名のグループ・インタビューの方法を取り、あらかじめ用意した質問事項に答えてもらうようにしたが、調査対象生徒と調査員のやり取りだけでなく、生徒同士が自由に話し合える形をとった。このインタビューは、韓国語と日本語のバイリンガルで教育事情に詳しい通訳者を介して行うことにしたが、複数の発言者の発言に対して調査員がその場で理解して応答できるように、質問を中心にインタビューを行う通訳者と、生徒の発言を調査員に伝える通訳者を別に用意した。さらにグループ・インタビューには韓国側研究者の権教授がオブザーバーとして参加した。インタビューは、通常の授業の合間を縫って行うことになるので、各高等学校の意向を受けて、所要時間を50分間とした。

- ・英語教員に対するインタビュー

調査対象校4校の英語科の教科主任クラスの教員を条件に、各校から1名に学校を代

## 第1章 調査結果

---

表して50分間のインタビューに応じてもらった。このインタビューは、正確を期するために、「生徒に対するグループ・インタビュー」に示した条件を有する韓国人通訳を介して行ったが、最初と最後には、調査対象教員と調査員が英語で直接に情報交換を行った。

### B. アンケート調査

既に述べたインタビュー調査に加えて、調査対象生徒には現在・過去の英語学習、日常での英語使用経験などに関する質問に、調査対象教員には、教員自身の教員歴、研修歴と、学校のカリキュラムの特徴や校内に整備されている教育機器、さらには学校行事等に関する補助的な情報を収集するための質問に回答してもらった。

### ④データ処理法

#### A. 生徒データの処理方法

生徒調査のまとめに当たっては、4校のうち1校のD校が留学準備クラスの生徒へのインタビューであったことから、A校、B校、C校のデータを主に扱い、D校の留学準備クラスのデータは補足的に扱った。ただし、今回の調査対象校が位置するソウル市は、江南地区などに代表される所得水準が高い地域と、その他の地域との教育格差が大きいと言われており、D校のデータも海外の大学を目指す一定層の学習者の傾向をつかむには有用であると思われる。

インタビュー・データは、韓国語で書き起こしたデータを日本語に翻訳して用いた。生徒調査データでは、グループ・インタビューという形式上の制約と実施時間の制約から、すべての質問項目に対して各個人の十分な回答を得ることができなかったために、アンケート調査への回答結果から全体的傾向を分析し、インタビューのプロトコルから、ケースデータとして質的情報を補足するという方法をとった。

#### B. 教員データの処理方法

教員調査のまとめに当たっては、調査対象教員から収集した50分間のインタビューを韓国語で書き起こし、さらに日本語に翻訳して作成したプロトコルから英語指導に関わるすべてのキーワードを拾い出して一覧にまとめ、基礎データを作成した。同一語が複数回用いられた場合でも、回数は考慮に入れず、キーワードのみをまとめ

る方法をとった。一方、教員は学校の代表であることから、4校のデータとして抽出したキーワードの出現の有無を学校数で示すことにした。

<例>

スキル指導スピーキングに関するA教員の発言から拾い出したキーワードとそれが出現した学校数

「自分の考えを話す機会はほとんどない」(A校)

「自己表現、整理して書く、パラグラフ・ライティング等の指導は行っていない」  
(3校)

以上のようにキーワードを取り出して学校数で示すことで、学校を代表する4名の英語科教員が提供してくれた情報のうち、どのような点が共通でどの点が異なっているかが明らかになるであろうと想定した。ただし、インタビュー調査から得た口述データと、それを補足するためのアンケート調査で得た記述データは、調査対象教員4名という状況であることから、あくまでも記述によって質的にデータを示すのが妥当であると考えた。

アンケート・データは、提供された情報がインタビュー内容を補足するものではあるが、学校における生徒の学習状況、学習環境を知るための手がかりを与えてくれるものとして、インタビュー・データと分けて表にまとめて提示することにした。

<参考文献>

緑川日出子(2008)『『英語力』と『日常の英語使用に関する意識』の比較研究(日本・韓国)～そこから読み取れる日本の英語教育改善への示唆』Benesse教育研究開発センター『東アジア高校英語教育GTEC調査2006 報告書(改訂版)』(株)ベネッセコーポレーション

## 2

## 生徒調査の結果

東京外国語大学専任講師 長沼 君主

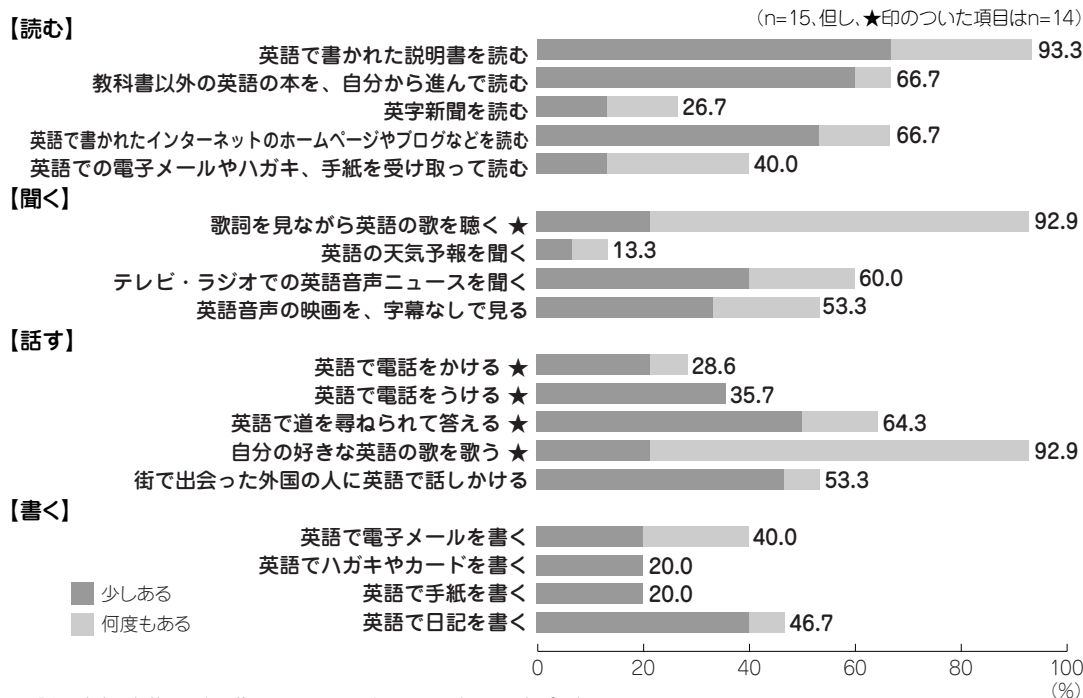
## 1) 調査結果と考察

## ① 日常英語使用経験について

## A. 「東アジア調査2006」調査結果概要

「東アジア調査2006」におけるアンケート調査からは、日本の高校生と比べて、韓国の高校生は学校での学習以外の日常英語使用経験率が高いことがわかった\*1。そこで二次調査においても今回の調査対象者に対して、日常英語使用経験について、「ない」「少しある」「何度もある」というように経験の頻度までもたずねる形で、再度アンケートに回答してもらい、インタビュー結果とあわせて考察を行った（図2-1）。「東アジア調査2006」日本調査の結果もあわせて示す（図2-2）\*2。

図2-1 韓国の高校生の日常英語使用経験（「二次調査」A校・B校・C校合計の結果）



\* 「街で出会った外国の人に英語で話しかける」は二次調査のみでたずねた項目。

\*1 「東アジア調査2006」結果サマリーは、p.6参照。

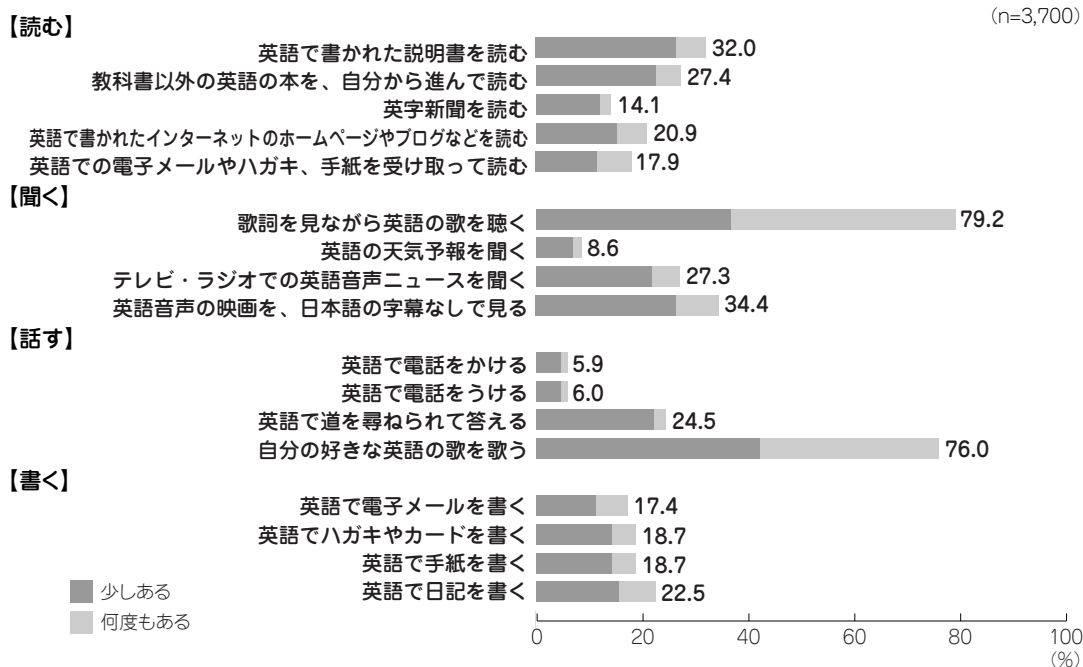


## B. 読む活動

回答者数が少ないことから一般化を行うことは難しいが、読む活動に関しては、例えば、「教科書以外の英語の本を、自分から進んで読む」や「英語で書かれたインターネットのホームページやブログなどを読む」で半数以上の生徒が経験したことがあると答えており（図2-1）、「東アジア調査2006」の日本調査では同じ項目が、20%から30%程度に留まっていることを考えると、今回の調査でも韓国のほうがより多くの生徒が学校外で英語のテキストに触れたことがある実態がわかる。ただし、これらの項目について、経験があると答えた韓国の生徒のうち、「何度もある」と回答した、日常的に英語に頻繁に接している生徒は1割程度とそれほど多くはなく、学習の面から考えるとそれほど大きな影響を持っているとは考えにくい（図2-1）。この結果はインタビューからも裏づけられており、2人の生徒が児童向けの洋書の『ハリー・ポッター』を原書で読んでいる（B校b、C校c）と答えた以外は目立った回答はなかった。

読む活動で「何度もある」と答えた回答が多かったと項目としては、「英語で書かれた説明書を読む」の26.7%があり、「少しある」もあわせると9割を超え、海外製品

図2-2 日本の高校生の日常英語使用経験（「東アジア調査2006」結果）



\*2 「東アジア調査2006」の韓国調査では、2003年度調査との比較を行う目的から日本調査とは異なるアンケート項目を用いていることから、二次調査では日本調査と同じアンケート項目を用いてアンケートを実施した。

## 第1章 調査結果

の説明書などに触れる機会が多い実態がうかがえる。一方で、「英字新聞を読む」は経験者の割合が26.7%と少なかった（図2-1）。また、「英語での電子メールやハガキ、手紙を受け取って読む」は全体では40.0%とそれほど大きな割合ではなかったが、3割弱が「何度もある」と回答しており、利用している生徒と利用していない生徒が分かれる結果となった。

### C. 聞く活動

聞く活動に関しては、「テレビ・ラジオでの英語音声ニュースを聞く」で、経験した生徒が60.0%と、「東アジア調査2006」結果と同様に日本と比べてやや高い経験率であったが、何度も経験している生徒の数はそれほど多くなかった（図2-1）。しかも、「何度もある」との回答には、多くの項目で「何度もある」と回答している同じ1名（C校e）の生徒が含まれており、多くの学習者の間で積極的な学習が行われているとは言いがたい。

その一方で、「歌詞を見ながら英語の歌を聴く」に関しては何度も経験していると答えた生徒だけでも7割を超えており（図2-1）、インタビューでもMP3プレイヤーなどを利用し、頻繁に聴いている様子がうかがえた。また、アンケートでは「英語音声の映画を、字幕なしで見る」は、それほど多くの生徒が何度も経験しているわけではなかったものの（図2-1）、インタビューからは、ケーブルテレビなどで英語の映画や海外ドラマを見ているとの回答が多く得られ、3分の2の生徒が映画や海外ドラマを通して英語に接していた。海外ドラマは日本とは異なり、吹き替えではなく字幕での放送であり、これらの経験が自然に学習へとつながっている可能性があるだろう。

### D. 話す活動

話す活動に関しては、「英語で道を尋ねられて答える」や「街で出会った外国人の人に英語で話しかける」では半数程度の生徒が経験していると答えたものの、「何度もある」と答えた生徒はごく一部に留まり（図2-1）、インタビューからも積極的に外国人に話しかけている様子はみられなかった。ただし、「小5の妹が小学校で英語を学習しているため、（英語で）話すことがある」（B校e）と回答したり、「母親も英語を学習している」（B校b）など、家庭で英語を話す機会がある生徒がいるようであった。また、英会話教室でない普通の学習塾でもネイティブスピーカーの講師による授業が

あり、会話をする機会があったり（A校e、C校e）と、授業以外でも英語を話す機会があることがわかった。また、D校ではc、d、eが「家族や友だちと英語で話す」と回答しており、より多くの生徒が積極的に話す機会を作っているようであった。

電話に関する2項目については、いずれの項目でも30%前後とさほど高い数値ではなかった（図2-1）。インタビューでもD校で海外の友だちと電話をすると答えた生徒がいたのみ（D校a）であり、多くの生徒にとってはなじみが薄いことがわかった。

## E. 書く活動

書く活動に関しては、全般的に経験率が低く、一番経験率の高い「英語で日記を書く」という項目でも「何度もある」と答えた生徒は1人のみであった（図2-1）。電子メールに関しては比較的多くの生徒が利用していると答えたものの（図2-1）、インタビューからは積極的な利用の声は聞かれなかった。D校では、インタビューの中で、「チャットをしたりしている」という声もあがっていたが（D校a、d、e）、普通の生徒は書く経験を日常的にしているとは言えないようだ。

## F. ICTを利用した英語学習および日常での英語使用時間

韓国ではICTの普及率が高いことから、そのことが日常での英語使用経験率の高さにもつながっているのではないかと推測された。しかし、今回のアンケート結果では、英語で書かれたインターネットのホームページやブログなどを読んだり、英語で電子メールを書いたりすることの経験が「何度もある」と回答した生徒の割合は1割から2割程度に留まっている。「英語での電子メールやハガキ、手紙を受け取って読む」の項目では、3割弱の生徒が「何度もある」と答えているが、電子メールだけでなく、ハガキ、手紙も含んでおり、これらの結果からは、日常的にICTを積極的に利用しているかどうかまではわからない（図2-1）。一方で、D校の生徒の一部ではソーシャル・ネットワークング・サービスを利用し、アメリカの友人と交流しているという声もあった（D校d、e）。ちなみに、今回の調査対象校のうち、いくつかで授業見学を行った中では、教師がノート型PCを教室に持ち込んで、プレゼンテーションソフトを利用するなど、ハードウェア、ソフトウェアの双方においてICTを活用した進んだ取り組みがみられた。しかし、生徒側ではウェブを効果的に利用して英語学習を行っ

## 第1章 調査結果

ている様子は特にみられなかった\*3。

また、今回のアンケート調査の結果によれば、生徒たちが勉強以外で英語に触れている時間は、平均で1日42分であったが、これらは主に洋楽を聴いたり、海外ドラマを見たりといった時間であると思われ、韓国の生徒の高いリーディングスコアやリスニングスコアの強い裏づけとまではならなかった。インタビューからも、以下のコメントにあるように、映画や音楽、ウェブなどを通じた学習を必ずしも行っているわけではなく、なんとなく耳や目に入ってくる程度であることがうかがわれた。

- ・「……外国の映画が出たら字幕を見ないで聞いてみるとか、そんなことをたまにしてみます。音楽も韓国の音楽よりはポップソングを多く聴こうと思って、MP3の半分はポップソングを聞いています。」(C校d)
- ・「ネットサーフィンをよくします。あちこちを見てると英語で情報を得るというよりも英語で書いてある文字を見る、って感じで」(B校c)

## ②学校外での英語学習状況について

## A. 学習塾での学習

韓国の英語教育の特徴としては、ICT利用を可能とするインフラが整備されていることに加えて、大学修学能力試験（以降、修能試験）のもたらす波及効果があげられる。これは通塾率の高さにもつながっており、日本の高校2年生の教科を問わない通塾率の割合が25.3%であったのに対して（Benesse教育研究開発センター、2007）\*4、今回インタビューに協力してくれた生徒のうち、比較的、所得水準が高い地域であるB校とD校の生徒で5人中5人、所得水準がそれほど高くない地域にあるA校とC校でも5人中2人の生徒が英語学習のために学習塾に通っており（C校は家庭教師も含めると

表2-1 現在の校外英語学習の状況

	A校 (n=5)	B校 (n=5)	C校 (n=5)	A,B,C校 合計 (n=15)	D校 (n=5)
	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)
教材、テレビ・ラジオなどによる在宅学習	1	1	3	5	1
英会話教室（会話中心）	0	0	0	0	0
学習塾（文字や文法などの学習中心）・予備校	2	5	2	9	5
英語キャンプなどへの参加	0	0	0	0	1
家庭教師	0	0	1	1	0

\*複数回答。

\*それぞれの項目に該当する欄に記入があったものを集計した。

\*本調査におけるD校の調査対象が、留学準備クラスの生徒という特殊性があったことから、A、B、C校と分けて集計を行った。

5人中3人)、ABC校全体の平均では60%と高い割合となっている(表2-1)。

## B. 自習室を利用した学習

学習塾と比べて、在宅での自学教材、テレビやラジオを利用した学習を行っている割合はABC校全体の3分の1と低かったが(表2-1)、これは各学校で放課後に自習室を開いていることの影響が強いと思われる\*5。教員インタビューの結果からもわかるように、とりわけC校では特に理由がない限りは全員自習室への参加が義務づけられている。その一方で、希望制をとっているA校では、1年生の段階で補習授業に出る生徒と出ない生徒が決まってしまうとの談話があった\*6。

## C. 英会話教室等での学習

今回のアンケートにおける「英会話教室」の利用に関しては、利用している生徒はいなかったものの(表2-1)、インタビュー結果では、通常の学習塾にネイティブスピーカーの講師がおり、会話の授業を受けている(A校e、C校e)と答えた生徒もいた。また、日本の教育テレビにあたるEBSの利用については、文法中心であるとの理由などからほとんど利用はみられなかったものの、学習塾でリスニングの授業を受けたり(B校a、b、c、d、C校b、e)、MP3プレイヤーを利用してリスニングを学習しているようであった\*7。これは修能試験にリスニングが含まれていることを受けてのことであると思われる、時間を決めて、ストップウォッチなどを用いながら学習している生徒もおり(A校b、e)、全般的に修能試験を意識した学習が行われている様子がうかがえた。

## ③英語学習に対する意識について

### A. 英語学習への情意

英語学習に対する意識については、量的な制約があったために、アンケートでは扱わず、インタビューでたずねる形をとった。まず、生徒の英語学習に対する情意的側面をみてみると、以下に取り上げたいいくつかのコメントから読み取れるように、やら

\*3 調査校での授業の様子は、第2章 高校授業見学レポート p.54参照。

\*4 同項目の学校の偏差値帯別の結果は以下の通りである。偏差値45未満：12.6%、偏差値45以上50未満：22.8%、偏差値50以上55未満：23.6%、偏差値55以上：39.1%。

\*5 各校の自習室の活用状況は、3. 教員調査の結果 p.39(表3-1)を参照。

\*6 インタビュー終了後、著者が通訳を通して生徒と談話した際に得た情報。

\*7 EBSはKorean Educational Broadcasting System(韓国教育放送公社)の略称。韓国の公営の教育専門放送局。

## 第1章 調査結果

なくてはいけないものとの意識が強い一方で、出来るようになることが楽しい、しなくてはならないのであれば、学習を楽しもうという情意的な態度が垣間みられた。

- ・「私は英語がとても嫌いでした。成績が悪くて嫌いだったんです。最近では学校での学習とかをちゃんとこなせば伸びるって感じが見つめたので、その部分で良いかなと思っています。」(A校b)
- ・「学校での勉強だけでなく塾での課題もやって、単語数を増やしていけば英語も伸びる。難しいけど、面白い。」(A校c)
- ・「英語はもともと全然できないほうです。他の人が80点の時に20点で。それでもっと嫌いになりました。今回の休みの期間に英語のドラマをすごく沢山見ました。それで耳が慣れたみたいです。今は単語を少し多く覚えたから、成績が物凄く上がりました。生活の中で接したので英語がもっと楽しくなったんです。」(B校d)
- ・「英語はやっぱり別の科目と違って、持続的なのが必要みたいです。一度に片付くものじゃなくて、ずっとそれを記憶していなければいけないし、何回も繰返ししなきゃいけないから大変だけれど、避けることはできないから楽しまなきゃ。」(B校c)

このように、英語を嫌いであるとか、しなくてはいけないなどの、否定的な感情をうまく肯定的な感情に変化させている様子がみて取れた一方で、以下に示すように、やらされている感情が勝っている生徒の様子もみられた。

- ・「どうせ入試があるから英語の勉強をしなきゃいけないし、就職する時にも必要で、海外旅行に行っても英語ができればこの国でも殆ど英語で通じるから。そんな感じでやっているんだと思います。」(C校b)
- ・「学校の英語の授業は試験を受けなきゃいけないので。そんな感じなので出ている内容を無条件に全部覚えないと試験で点数を取れないので、英語の勉強をするというよりは暗記をやっているんだという気分です。」(C校e)

### B. 英語学習への自己効力感

英語学習に対する情意的態度は分かれたものの、全体的にみて、生徒たちは、英語はやれば出来るようになるとも感じているようであった。以降のコメントからわかるように、模擬考査の結果を指標としながら、前向きに結果を受け止め、主体的に学習をコントロールしようとしている様子がうかがえる。

- ・「まあ模擬考査の成績がなんとか下がってはいないので、今までも続けて頑張っていたわけじゃなく、すこしサボった部分もあるので、これから頑張ればいいだろう。そんな感じで漠然ですが信じています。」(A校a)
- ・「私は学校が終わったら塾に引っ張っていかれるのがとっても嫌で、あ、またやらなきゃいけないの、って感じです。去年の模擬考査をしてから、ああ、こんなじゃだめだと思ってこういうことを考えました。できれば塾で出されるのを基本的にやって、自分から探してはできないけど、やったのは完璧にやったと思うようにして、主導的な方向にマインドが少し変わったようです。そういう風にずっとやっていけば違ってくるんじゃないかと。」(B校c)

### C. 英語学習への動機づけ

英語が出来るようになりたい、やれば出来るようになるといった意識が強い反面、なぜ英語を学んでいるのかといった動機づけについては、現在の学習は修能試験のための学習と割り切っており、社会に出て使える英語のためであるとの認識は低いことが、以下のコメントに表れている。

- ・「社会生活をするようになると、書類作成や会話とかが主として必要だと思いますが、その部分を学校でやっていないので、私たちが文法とかを勉強したからと言ってそのまま適用できるのではないから、そうやって適用する方法を学ばなきゃと思うのですが、今はまだ、ただ学校や試験に出る英語を中心に勉強をしていますから。社会に出てそのまま使える、とは思いません。あとで別にもっと勉強しなきゃと思っています。」(A校a)
- ・「僕も皆が言ったとおり、学校や模擬試験でいい点数だったからといって社会に出てから意思疎通がちゃんとできるわけじゃないし。外国人と会った時、自然に話ができる程度になってこそ英語ができるな、と思います。」(C校d)

その一方で、将来に対する夢のために現在の学習を捉えている様子もみられた。2004年度に実施した過去の東アジア調査でも日本の生徒に比べて、韓国の生徒は将来に対する目標がはっきりしているとの結果が示されたが(ベネッセコーポレーション、2005)、企業等でも積極的に英語が使える人材を求めており、英語を学習した成果が社会で必要とされる度合いが強く、夢を持ちやすい環境であると言える。

- ・「将来やりたい夢があるので、そのためにも一生懸命やらないといけなと思います。」(A校c)

## 第1章 調査結果

- ・「英語の文法がたまに嫌いになるんですけど、外国人に会ったり、あとでアメリカとかに行っても対話が簡単にできるように、わざと沢山慣れるようにしたいです。」(B校d)

このように、英語学習に関しては、「修能試験のために」という、外発的で道具的な短期的動機づけが高い反面、長期的な視点で「社会に出てから英語を用いたい」といった、内発的動機づけも持ち合わせているようである。また、英語の学習は強制されてやっているが、やりたくないと答えた生徒はいなかった点からも、英語の社会的重要性が高く、学習者にもそのような意識が浸透しており、それが学習への高い動機づけへとつながっているようであった。

## ④これまでの英語学習について

## A. 校外学習

今回の調査対象者はすべてが小学校での英語学習を経験している生徒であるが、高校入学以前の英語学習の実態や意識についてはどうであろうか。表2-2は中学生時の校外英語学習の状況、表2-3は小学生時の校外英語学習の状況に関するアンケート結果をまとめたものである。これらの結果を学校別にみても、高校での通塾率が5人中5人であったB校とD校では、小学校、中学校の段階でもほぼすべての生徒が塾に通っていたようであった。一方、C校では小学校時では英会話教室に通っていた生徒がいたものの、中学校時ではほぼ全員が塾へと切り替えていた。B校でも小学生時に英会話教室に通っていた生徒も中学校では通わなくなっていた。小学校までは会話中心であった学習が、中学校に進むと同時に学校での学習内容の変化とあわせて、学校外での学習も変化しており、会話力を維持しようとの意識的な校外での学習はみられ

表2-2 中学生時の校外英語学習の状況

	A校 (n=5)	B校 (n=5)	C校 (n=5)	A.B.C校 合計 (n=15)	D校 (n=5)
	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)
教材、テレビ・ラジオなどによる在宅学習	1	0	2	3	0
英会話教室（会話中心）	0	0	1	1	0
学習塾（文字や文法などの学習中心）	2	5	4	11	5
英語キャンプなどへの参加	0	0	0	0	0
家庭教師	0	2	2	4	0

\*複数回答。

\*それぞれの項目に該当する欄に記入があったものを集計した。

\*本調査におけるD校の調査対象が、留学準備クラスの生徒という特殊性があったことから、A、B、C校と分けて集計を行った。



ないようであった。

表2-3 小学生時の校外英語学習の状況

	A校 (n=5)	B校 (n=5)	C校 (n=5)	A、B、C校 合計 (n=15)	D校 (n=5)
	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)	人数 (人)
教材、テレビ・ラジオなどによる在宅学習	2	2	3	7	2
英会話教室（会話中心）	0	3	3	6	1
学習塾（文字や文法などの学習中心）	2	5	1	8	4
英語キャンプなどへの参加	0	0	0	0	1
家庭教師	0	1	1	2	1

\*複数回答。

\*それぞれの項目に該当する欄に記入があったものを集計した。

\*本調査におけるD校の調査対象が、留学準備クラスの生徒という特殊性があったことから、A、B、C校と分けて集計を行った。

## B. 小学校での英語学習の効果

インタビューおよびアンケートで、高校入学以前のこれまでの英語学習の影響についてたずねた結果、インタビューにおいては、小学校での英語学習に関しては、「あまり覚えていない」との回答が多く、具体的な効果も認識していないようであった。

- ・「小学校の時にやったのは別に効果がないと思います。ただ中学校の時から今までは似た熟語が出ています。それを見たら、ああ、これはあの時勉強したって感じで。でも小学校の時までは記憶にないですね。」(A校a)

また、アンケートの記述文からも同じような回答がみられた。

- ・「中学校のとき英語に初めて触れるのより、拒否感が少なくなると思う。しかし、特別、小学校の授業の内容で思い出せるものはなかった。塾で授業をうけた文法などは少し覚えている。」(A校b)
- ・「英語に興味を持つようになったことを除いては、別段影響がなかったと思う。」(B校b)

## C. 中学校での英語学習の効果

ただし、小学校での英語学習に対して具体的な効果を感じていない生徒がいる一方で、インタビューでは、小学生のときに英語に親しんだことにより、中学校で繰り返し同じ内容が出てきたときに、役に立ったとの回答もみられた。

- ・「小学校3年生の時に勉強したのが4年生、5年生、中学校に行ってから似たかたちで出ているんです。それを見て、いつ習ったのかだいたいわかる感じがします。何回も繰

## 第1章 調査結果

返してやっているのです。知らないのを除いては全部わかる感じです。」(A校c)

- ・「だんだん学年が上がるほど、この単語は皆知ってるよね?とか言われて、その時はとっても難しく聞こえた単語が、あれ、そう言われればそうだっけ、って感じになって、役に立っていると思います。」(B校c)

ただし、これらの回答をした生徒はいずれも小学生時に塾や英会話教室にも通っており、小学校での英語学習だけの効果かどうかはわからない。

### D. 高校入学以前の英語学習の肯定的側面

小学生時の英語学習に効果を感じていないことの理由のひとつには、中学校段階になると文法中心の授業展開となり、小学校での英語学習に効果を感じにくいということもあげられるだろう。実際、急に難しくなり、大変であったとの声(A校e、C校d)も聞かれた。一方で、中学校で基本的文法を身につけたことは、高校に入ってから学習の基礎となったとの意見も多く(A校b、e、B校a、b、c、d、e、C校b、d、e)、高校での授業との接続の点で、中学校での英語学習の効果を感じているようであった。ただし、小学生時に英語に対して否定的な反応を示している生徒はおらず、その意味では小学校における英語学習経験が抵抗なく受け入れられ、それが中学校での英語学習に継続していることが読み取れる。

小学生時の英語学習については、直接的な効果を感じられているかということも必ずしもそうではないが、塾や英会話教室などでの学習も含めて、繰り返しの学習により、より英語に親しんでいる様子はうかがえた。権(2007、p.83)によれば、高校2年生の回答として、小学校での英語学習が役に立った点を「なし」と答えた学習者が31.6%、「単語」と答えた学習者が30.8%、「英語の基礎を固める」と答えた学習者が10.9%、「英語に親しむ」と答えた学習者が10.6%であったが、今回の調査結果はこれとほぼ同様の結果であったと言えよう。このことが高校1年生の段階から、受験勉強に大きく方向づけられるという状況の中でも、高校生たちが英語学習への動機づけを失わない要因になっているかどうかは定かでないが、少なくとも小学生時の英語学習で英語を嫌いになり、そのまま高校でも英語嫌いとなってしまうといった様子はみられなかった。

## 2) 調査目的である2つの質問に対する考察

以下、これまで述べてきたことをもとに、本調査の調査目的でもある2つの課題につ

いて考察を試みたい。

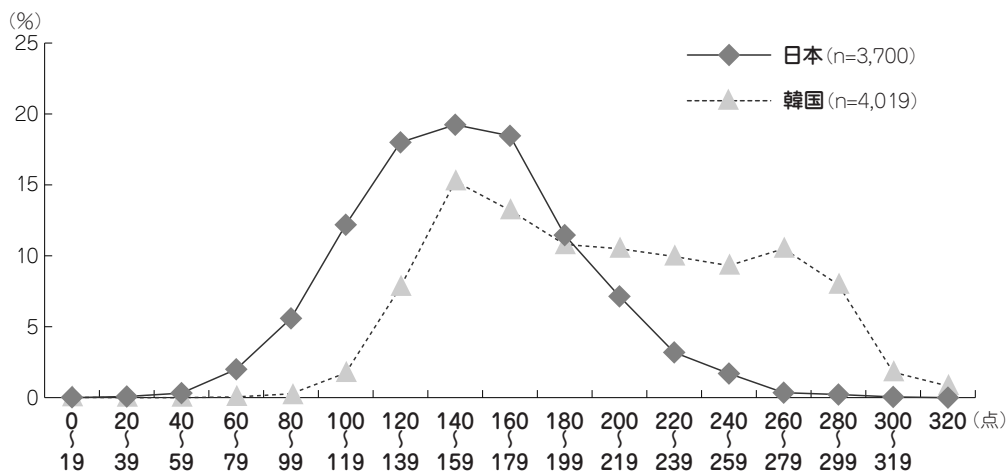
- ①「韓国の高校生のリーディングとリスニングの能力（GTEC for STUDENTSによる）が、ほぼ同年齢の日本の高校生に比べて非常に高いのはなぜか」

リーディングのスコアが高かったことに関しては、生徒調査からは明確には原因が特定できなかった。ただし、中学校で基礎的な文法の学習を徹底的に行っており、さらに高校でこれを反復していることにより、基礎的な読解能力が高まっていることがうかがえた。また、教科書も厚く、通塾率も高いなど、日本と比べてそもそもの学習量が圧倒的に多いことが要因と考えられる。

ただし、「東アジア調査2006」の結果では、韓国のリーディングスコアは上位層と中位層の二つの群に分かれており、塾や自習室を積極的に利用する学習者層とそうではない層とに分かれている可能性があるかもしれない（図2-3）\*8。

リスニングスコアに関しては、学習塾などでのリスニングの授業の影響があげられるだろう。授業中ではなく課題として行っているケースもあるようであるが、修能試験にリスニングテストがあることにより、自主的にMP3プレイヤーなどを利用しての学習を行っている生徒もおり、これらが高いスコアの要因の一部であると考えられる。リーディングと異なり、スコアは二層に分かれておらず（図2-4）、全体的に高い結果であったが、このことは生徒本人に自覚されているかはともかくとして、一部の回答にみられ

図2-3 韓国・日本のリーディングスコアの分布（「東アジア調査2006」結果）

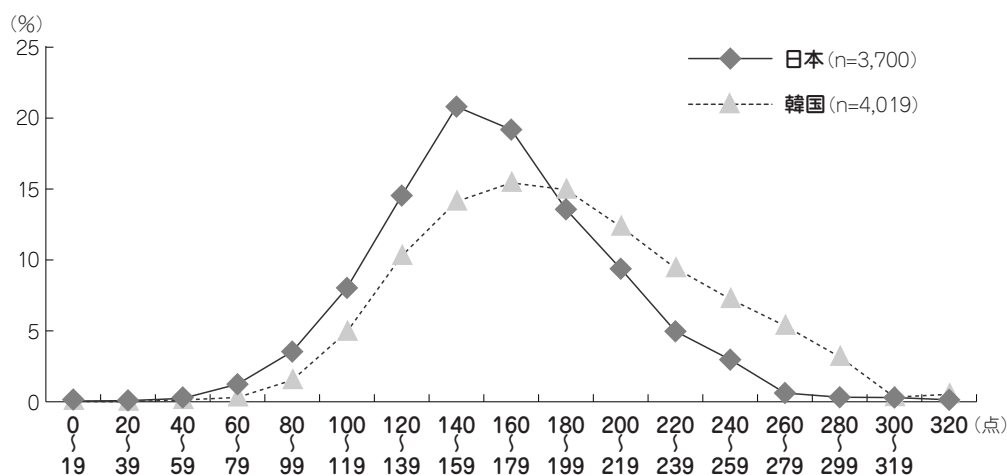


\*8 中位層のスコアの山の頂点は日本の全体の山の頂点とほぼ重なっており、決して低い能力であるわけではないことに注意を必要がある。

## 第1章 調査結果

たように、小学生時から、音から始めて英語の語彙に親しんでいることの効果もあるかもしれない。

図2-4 韓国・日本のリスニングスコアの分布（「東アジア調査2006」結果）



②「韓国の高校生の日常の英語使用経験率（アンケート結果による）が日本の高校生に比べて非常に高いのはなぜか」

今回の生徒調査からは、とりわけ日常的に英語を使用している様子うかがえなかった。そもそもこの問いは、「東アジア調査2006」のアンケートで、韓国の生徒の英語使用経験率が高かった、という結果に基づいて設定されている。しかし、今回のアンケート調査で、経験の頻度まで踏み込んでたずねた結果、冒頭で述べたような日常的な英語使用経験はさほど多くはないという実態がみえた。これらの点から経験率が高いということが、頻繁に英語を使用していることをそのまま意味するわけではなさそうであることがわかった。

また、それと同時に、D校の生徒のように、韓国の高校生には、頻繁に英語に触れている層も存在することもわかった。D校は所得水準が高い地域にあり、この点から、地域的な経済格差や教育への意識差が学習環境の相違に影響している現状もうかがえた。

### 3) まとめ

韓国と日本の高校生を比較した際に、韓国の高校生のスコアが高かったことについて、我々は、日常生活における英語使用経験率の高さやICTを利用した英語学習、小学校での英語学習の影響、修能試験に根ざした学習塾や予備校での学習など、いくつかの要因を想定した。しかし、今回のインタビュー調査からは、日常生活における英語使用や小学校時の英語学習の直接的な影響よりも、修能試験が高校での英語学習に与える波及効果の高さを示唆する結果となった。多くの生徒は日常的に英語に接するよりも、塾や自習室での学習に多くの時間を費やしており、その学習内容は修能試験の内容を色濃く反映するものであった。

一方で、修能試験自体は、画一的な文法中心の試験ではなく、工夫された多様な形式による出題がなされている。また教科書のテキスト量も非常に多く、自然と速読的な読みが要求されるといったように、いわゆる文法訳読式のつめこみ学習ばかりを行っているわけではないことにも着目する必要があるだろう。

今回の調査からは小学校における学習の直接的な効果は、少なくとも学習者本人にはさほど感じられていないという結果ではあったが、スキル面だけではなく、学習動機への影響も含めてより詳細に効果を検討していくには、中学校でどのような学習がなされ、それが小学生時の学習といかに接続しているのかを探っていく必要がある。日本において小学校での英語活動（正式には外国語活動）を導入するにあたっては、韓国の先行事例を安易に成功事例と捉えるのではなく、社会的環境とも照らし合わせながら、その背後の要因を読み解いていくことが求められるだろう。

#### <参考文献>

- 権 五良 (Oryang Kwon : 研究責任者) 他 (2007) 『小学校の英語教育10年の成果分析による小・中学校英語教育の活性化方案模索』大韓民国教育人的資源部 (株) ベネッセコーポレーション翻訳  
Benesse教育研究開発センター (2007) 『第4回学習基本調査・国内調査報告書・高校生版』(株) ベネッセコーポレーション  
ベネッセコーポレーション (編) (2005) 『東アジア高校英語教育GTEC調査：高校生の意識と行動から見る英語教育の成果と課題』(株) ベネッセコーポレーション

## ③ 教員調査の結果

昭和女子大学教授 緑川日出子

### 1) 教員インタビュー調査の結果

教員インタビューの調査結果については、以下に内容を箇条書きで示す。

#### ① 授業指導について

##### A. 教科書の扱い\*1

- ・4技能を扱う教科書であるが読解、文法、語彙中心の指導を行う（4校）
- ・2年次までは教科書はすべて省略せずに用いる（3校）
- ・3年次では教科書だけでは不十分のため補充教材を追加して用いる（3校）
- ・習熟度別クラスを実施しているので教科書の扱いは別（2校）
- ・習熟度別クラスのうち基礎クラスは3年次を通して教科書のみを使用（D校）

#### <補足>

- ・注1：インタビュー時に「英語」の授業で意味しているのは、1年次必修の「英語」、2年次学校選択の「英語Ⅰ」、3年次学校選択の「英語Ⅱ」である。以上の3科目は、調査対象校4校の全てで文系・理系を問わずに履修されている。また「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」は選択科目ではあるが、多くの普通高等学校では大学修学能力試験に向けて両科目が選択されているようである。履修関係のさらに詳しい情報は調査対象校の概要（資料編p.64）参照。
- ・注2：1年次必修の「英語」、2年次学校選択の「英語Ⅰ」、3年次学校選択の「英語Ⅱ」は、リーディング用テキストを中心にして、4技能、コミュニケーション、文法、語彙の練習問題を含む総合本と考えてよい。
- ・注3：習熟度別クラスの実施状況は、表3-2 教員アンケート調査結果まとめ（p.40）参照。

##### B. 授業における補助教材の使用状況

- ・1、2年生の補助教材は教員の手作り。3年生は市販の副教材を部分的に利用して独自の補助教材を用いている（B校）
- ・EBS教材は国の公認教材\*2。講義用テキストを練習問題化して利用している。アドバンスト・クラスでは教科書だけでは不十分のため、リスニングの教材や教員

\*1 教科書の1課の構成例は、第2章高校授業見学レポートp.57参照。

\*2 EBSは、Korean Educational Broadcasting System（韓国教育放送公社）の略称。韓国の公営の教育専門放送局。

の手作りハンドアウトを用いる (C校)

<補足>

注1：韓国ではEBS教材以外の副教材テキストをそのまま授業で用いることは禁じられている。

### C. スキル別指導・文法・語彙の指導

#### a.スピーキング指導

- ・ダイアログを聞かせる、またはリピート程度 (2校)
- ・暗記、聞き取り中心で自分の考えを話させる機会は少ない (A校)

#### b. リスニング指導

- ・授業の中で指導 (3校)
- ・3年次には授業時間の中にリスニング練習の時間をまとめて取る (2校)
- ・3年次には市販のリスニング教材を授業の中で用いる (D校)

#### c. リーディング指導

- ・内容理解の設問に答えさせる活動中心 (3校)
- ・テキストの暗記や音読はさせない (3校)
- ・全訳は行わない (3校)
- ・テキストの設問を大学修学能力試験 (以降、修能試験) の出題に役立つように用いて指導 (A校)
- ・要旨・論旨を問う設問を用いて内容理解の指導 (D校)

#### d. ライティング指導

- ・自己表現、整理して書く、パラグラフ・ライティング等の指導は行わない (3校)

#### e. 文法・語彙の指導

- ・文法と語彙の指導は工夫して丁寧に行っている (3校)
- ・語彙は大量に暗記させる (A校)
- ・語彙指導は学年で統一。テキストに入る前、テキスト終了後にテスト (D校)
- ・学習語彙は事前にプリントで配布、自宅での意味調べなどは時間がかかるのでさせない (D校)

### D. 英語による授業の実施

- ・英語の授業の50%程度は英語で行っている (B校)

## 第1章 調査結果

- ・生徒の習熟度が高ければ高いほど教員の授業での英語使用量が増す（D校）

### <補足>

注1：2001年度以後、日本の文部科学省にあたる韓国教育科学技術部（2008年2月に教育人的資源部から名称変更）は授業における教員の英語使用を奨励しているが、強制はしていない。

## E. 新しい評価（遂行評価：パフォーマンス・アセスメント）の実施状況

- ・遂行評価を成績評価に加えている（2校）

### <補足>

注1：韓国では1999年度より初等・中等教育で遂行評価が義務化され、科目の評点に最低でも30%の遂行評価による得点を加えることとされている。

## ②授業外の指導について

### A. 予習と宿題

- ・予習は生徒に任せてあるが、単語の学習だけは家で行うよう指導している（2校）
- ・生徒が学習しなければならない科目が多いので宿題はほとんど出さない（3校）
- ・十分に予習をさせて授業でわからないところを質問させている（A校）
- ・家庭学習の習慣は小学生の頃から身につけているので、教室外学習管理は自己責任（2校）

### B. 授業時間以外の補充授業

- ・早朝または放課後に補充授業を行っている（4校）

### <補足>

注1：補充授業の形態は学校により異なるので以下、学校別に詳細を示す。

- ・1、2年生は週2時間、3年生は週1時間の補充。科目選択制でほとんどの生徒が選択している（A校）
- ・すべての学年で希望した生徒に週2時間。英語は1クラス程度だが、あまり英語が弱い生徒が少ないので希望者が集まりにくい（B校）
- ・全学年に早朝1時間、3年生は8時間目に1時間、3年生は選択制（C校）
- ・放課後に実施。受講したい生徒がインターネットで応募する方法をとっている（D校）

### C. 学校における夜の自習室利用

- ・自習室利用時間は平均5～6時間程度（4校）



- ・ 自習室用の独立した建物または施設を有している（4校）

<補足>

注1：自習室の利用法は学校によって若干異なっているので、以下表3-1に学校ごとの利用条件、利用状況をまとめた。

表3-1 各校の自習室の活用状況

	A校	B校	C校	D校
自習室の有無	1、2年生は、それぞれに1年生用、2年生用自習室がある。3年生はそれぞれの教室でやる。	自習室の収容人数は300人。	3階建の建物すべてが自習室となっている（1階：3年生、2階：2年生、3階：1年生）。	特別読書室（図書室のような自習室）を今年からつくった（210席）。
対象	1、2年生の希望者のみ（人数は、120人、全体の3分の1程度）。3年生の場合は、事情（家庭の行事、体調不良など）がない限り参加。	3年生が優先。部屋に全員は入れないので希望する生徒のみ。	自律学習を強調しており、塾の受講証などを提示しない限り、全員自律学習をするということが原則。1・2年生は希望者に限っているところもある。	希望者の中で参加率の高い生徒を優先。3回以上無断欠席すると入れなくなる。
利用時間	夕食を食べてから午後6時～10時まで。遅くまで勉強する生徒は午後11時、11時半までの残っている生徒もいる。	放課後（午後4時半）～12時まで。	1、2年生は、午後6時か6時半～10時。 3年生は午後6時～11時。 午後8時半ぐらいに15分休憩をとる。	平日は午後6時～12時まで。
監督の有無	—	—	監督の先生が各学年1人つく。	監督あり。
補足	自習室では自分が持っているものを勉強する。	—	—	特別図書室に入れない生徒は教室で勉強し学年あたり2～3人先生が残って監督をしている。

\* — は回答が得られなかった項目。

D. 生徒の教室外での英語使用経験

- ・ 中学では学校で学んだことを外で使う場面（ネイティブスピーカーと会う、英語で電話をかけるなど）を行ったり、行わせたりする機会があったと思う（3校）
- ・ 中学では宿題として英文日記を書かせたりする。今も続けて書いている生徒がいるかもしれない（B校）
- ・ 中学ではインターネットで資料を探す英語の宿題が多かったし、高等学校でもインターネットを用いさせる機会が多い（B校）

E. 生徒の過去の英語学習（特に小学校の英語学習の効果）

- ・ パフォーマンスを好み、積極的でオープンな態度である（4校）
- ・ 英語の力は小学校で英語が必修のときの生徒と差がないと感じている（2校）
- ・ 小学校で英語を必修で学んだ生徒のほうがスピーキング能力はある（2校）

## 第1章 調査結果

- ・失敗を恐れず、また恥ずかしがらずに話そうとする (2校)

## 2) 教員アンケート調査の結果

教員アンケート調査の結果は、①英語の授業と関連情報のまとめと、②生徒の英語能力に関する意見のまとめとして下の表に示した。

表3-2 教員アンケートの調査結果まとめ

①英語の授業と関連情報のまとめ	
1. 授業における1クラスの生徒数	・40人以下 (4校)
2. 英語のカリキュラムの特色	・特筆すべき特徴はない (3校) ・会話についてはネイティブ・スピーカーとティーム・ティーチング (D校)
3. 習熟度別クラスによる授業の実施	・1年生のみ (2校) ・1、2年生 (C校) ・全学年 (D校)
4. 英語の授業の特徴*1	・大学修学能力試験対策重視 (4校)
5. 授業外の英語関係行事・イベント	・なし (2校) ・英語語彙、会話、リスニングのコンテスト、クラス別英語劇コンテスト (C校) ・スピーチ・コンテスト、スペリング・コンテスト (Spelling Bee) (D校)
6. 英語の自学用の設備・施設	・マルチメディア室開放 (A校) ・インターネット室 (但し主にコンピューターの授業で使用) (B校) ・備えており生徒に自信を与えている。授業では施設を使用しない (C校) ・EBS*2教材の視聴設備 (D校)
②生徒の英語能力に関する意見のまとめ	
1. 生徒に養わせたい英語力	A校 ・生活する上で不自由しない程度の読解力 ・自信をもって聞き取ることができるリスニング力 ・自信をもって意見を述べる程度での会話力 ・望む大学に合格できる程度の語彙・文法力
	B校 ・多様な知識や情報を理解できる程度の読解力 ・対話やまとまった量の英語を理解できる程度のリスニング力 ・簡単な会話力
	C校 ・読解力 ・文法知識 ・語彙力
	D校 ・読解力 ・会話力 ・リスニング力
2. 生徒に養わせたい英語力を卒業までにどの程度到達し得るか	A校 ・平均55~70%
	B校 ・読解力 70% リスニング力 60% 会話力 20%
	C校 ・70%
	D校 ・70%

\*1: 調査票では、「ご勤務校の英語の授業はどれに近いと思いますか。あえて言えば近いと思う番号に○をつけてください。」という形でたずね、以下の選択肢 (1. 英語コミュニケーション能力育成重視、2. 大学修学能力試験対策重視、3. その他) から選んでもらっている。

\*2: Korean Educational Broadcasting System (韓国教育放送公社) の略称。韓国の公営の教育専門放送局。

### 3) 考察

#### ①授業指導についての考察

##### A. 教科書の扱いについて

教科書の扱いについては、1、2年次の教科書はおおむね省略せずにすべてを扱うというのが一般的状況であることがわかる。しかし、3年次の教科書については、前期に教員が内容を選択して用い、後期は教科書を用いずに修能試験のための練習問題を行っているようである。3月に新学年開始、11月に修能試験というスケジュールから、3年次後期(9月開始)は教科書を用いないという状況が推察できる。また、多くの学校で、3年次は教科書を用いずに問題演習を行うという実態があるとC校教員からコメントがあったが、実際にそのような事実があるかどうかについては、この時点では確認できていない。しかし、平均的レベルの受験校である本調査の調査対象校のほとんどが、教科書が平易で試験対策としては不足であると答えていることから、生徒の習熟度がより高い学校では、3年次は教科書を用いないというのは十分に推察が可能である。

教科書の構成については、第2章p.57で一例を示しているが、韓国の教科書は科目別にすべて同一名で出版されており、内容の構成も類似している。本調査の調査対象校の使用教科書についても、読解用テキストにはプレリーディング、リーディング、ポストリーディングの形式で内容理解と読解ストラテジー指導が中心になっているが、そのすべては問題形式で提示されている。また、4技能、コミュニケーション、文法、語彙についても、ほとんどすべてに練習問題形式が用いられて、外国で出版されているEFL(English as a foreign language)教材と類似している。授業指導の中でそれらの問題を修能試験対策として用いているという言及もあり、教科書は大学教育を受けるために必要な英語力を養うために編纂されたEFL教材ととらえることができる。このような特徴を有する教科書の用い方で最も強調されるのは、読解、文法、語彙の分野で、その理由は、教科書が修能試験の対策用に用いられているためだと言えそうである。

##### B. 授業における補助教材の使用状況について

書店には音声教材を含めて、修能試験対策を中心とした補助教材が多数販売されているが、これらの一括採用や、特定の補助教材を教員が授業で用いることは法律で規制されているということである。その理由は特定の出版社だけが採用の恩恵を受ける

## 第1章 調査結果

という問題を避けるためであるらしい。どの学校でも教員が自前の補助教材を作成しているらしいことは、インタビューと3校の授業見学からもうかがえた。補助教材の作成方法は、EBS教材（テキスト）の教材化に加えて、既存の出版物から適当に抜粋したり、英字新聞、インターネット等を利用して教材を作成しているというのが一般的状況であることがわかった。ただし、リスニング教材については、簡単に手作りすることが難しいことから、市販教材のニーズも高いようである。

### C. スキル別指導・文法・語彙の指導について

「教科書の扱いについて」の項で韓国の英語教科書はスキル別の練習問題が多く組み込まれていることを指摘した。「スキル別指導・文法・語彙の指導」についての回答から、韓国では授業指導においてもスキル別指導の傾向が強いことがわかる。しかし、強調されるのは、読解、文法、語彙とリスニングで、特にリスニングは2～3年生で試験対策として一定時間を割いて指導するのが一般的傾向であることがわかった。また、読解用テキストの音読やテキストを繰り返し音読して暗記させるような指導は、一般的には行われていないという状況が、4校の教員のインタビュー結果から明らかになった。その理由のひとつに、覚えるには量が多すぎるという指摘があった。さらに、教員間で、日々の授業で何をどのように指導するかについて話し合いで決めるようなことはなく、音読の意義についても見解の一致がないようである。スキル指導については、他の教員がどのように指導しているかについて、あまり関心がないのではないかと思われた。しかし、これは、4技能のスキルと文法・語彙、コミュニケーションの能力を測定する修能試験が、正解を択一式で求める試験形式で出題されることが周知されていて、何をどのように指導すべきかについて、すべての教員が共通の認識をもっているからであろう。

教科書にあるスピーキング、トーキング、ダイアログ、コミュニケーションなどのスピーキング能力向上のための練習問題は、テープを聞かせたり音読させたりする程度に留めていることや、ライティングの指導では、表現や形式の定着についての練習問題は用いるが、英作文を実際に書かせる練習は行わないのが普通であることがわかった。なお、これらの点について、3校の教員から、ライティング指導を行わないのは修能試験にライティングが出題されないためであるという指摘があった。

スキル指導の中心は読解指導であり、内容理解とパラグラフ構成、内容の批判、評価

等を行わせているらしく、文法や語彙の指導は読解テキストに入る前に徹底的に行ってしまうというのも一般的な傾向であることがわかった。授業は生徒が予習の段階でわからないことを明らかにしてくることに、内容読解に必要な語彙は教員がパラフレーズによって意味を説明した語彙リストを事前に配布し、内容読解に入る前にテストによって確認するというのが一般的な指導法であるらしいということもわかった。それらによって、語彙の障害を取り除いて内容読解を行わせるというものであり、全訳を行うと答えたのは1校だけであった。しかし、この学校の場合は、1年生で習熟度別クラスを用いており、全クラスで全訳を行うと考えるのは若干不自然である。このことは、習熟度によって指導法や英語の使用量を変えるという指摘からも推察できる。一方、語彙や連語、イディオム等については徹底的に覚えこませているようである。テキストの内容読解終了後に、Language Workのセクションで文法、語彙、ディスコースなどのまとめ学習が練習問題の形式で用意されているが、授業見学の様子から、各教員が自作の教室用教材やプリントを用いてさらに語彙や文法の指導を行っている様子がみて取れた。本調査では、直接に日本の高等学校との比較を行ってはいないが、韓国の高校における英語の授業は、日本の高校のそれに比べ、修能試験の成功を目指して、その出題形式にあわせて指導するという実態が明らかになった。

このことについて、インタビューに応じた教員にインタビュー終了後に英語で意見を求めたところ、すべての教員がスピーキング、ライティングなどの表現能力の指導が行われていないのは由々しいことであると述べていた。これは教員の指導力の問題ではなく、それらが修能試験に出題されないことによるものであると説明しており、コミュニケーション能力の育成を国家の外国語教育政策の柱とする韓国の高校教育の理想と現実の乖離も明らかになった。

#### D. 英語による授業の実施について

英語による授業が行われているかどうかについて、明確に行っていると答えたのはB校とD校の教員であった。2001年度からは韓国教育科学技術部が英語による授業を奨励しているが、国全体としてはどのような状況であるのか推し量ることができない。韓国では2010年から初等・中等教育機関では英語の授業は英語で行うという考えが国家の非公式な見解として発表されているが、本調査の韓国側研究者の権教授によれば、そのための具体的な施策は検討されていないので、実際にそのようなことが起

## 第1章 調査結果

こるかどうかはわからないということである。しかし、現在ソウル市教育庁では、英語授業のうち少なくとも週1回は英語で行うことを奨励しているということで、授業見学をした3校の授業も英語で行われていた。また、その1校であるD校の教員は、特に英語で行う授業のみを担当しているということであった。

### E. 新しい評価（遂行評価：パフォーマンス・アセスメント）の実施状況について

遂行評価の実施状況について、行っていると言明したのは2校だけである。しかも何をもって遂行評価とするかについての一致した見解については、インタビューの答えから推察するのは不可能である。A校では1、2年次には自己紹介の英文を白紙に書かせて10点分の評価を与えたと述べている。B校では毎週行っている熟語や例文の暗記テストの得点をこの評価に加えることのほかに、スピーキングのダイアローグをペアで暗記させ、その結果も遂行評価に加えるということであった。また、遂行評価をインターネットで行ってくれるサイトも利用できるということであり、30%以上を遂行評価点にしなければいけないという規定になってはいるが、どのような方法でこれを実施しているかについては、さらに調べてみたい課題として残った。

## ②授業外の指導についての考察

### A. 予習と宿題について

インタビュー結果から、英語の授業では宿題を課すことは少なく、予習も生徒の自主性に任せているという状況が中堅進学校の一般的状況であると推し量ることができる。生徒には既に学習習慣が確立していることと、修能試験のために自ら学ばなければならないことを生徒が自覚しているからであろう。授業の準備なしで授業に臨めば、定期試験で悪い結果が出るのは当然で、教室外学習の自己管理については生徒の自己責任であるという教員の態度にも毅然としたものがある。

### B. 授業時間以外の補充授業について

すべての調査対象校で、時間数と実施学年に多少の差はあるものの、始業前または放課後に補充授業を行っていることがわかった。しかしながら、英語の補充授業は人気がないこと、英語については補充授業を必要としないという学校、これと反対に英語に弱い生徒のみに少人数の補充授業を行う学校など、その方法は学校によって異

なっているようだ。

### C. 学校における夜の自習室利用について

自習室での授業外学習はすべての調査対象校で行われていた。自習室用の独立施設を有する学校、普通教室や図書館の利用など学校によって状況は異なるが、午後6時から5～6時間程度の自習室利用を可能としている。C校では、1～2年生は3年生より短い自習室利用時間の制限を設けているほかは、どの学校でもすべての学年に利用させている。ただし、A校では3年生は塾や家庭教師との個人的学習計画がある生徒を除いたすべての生徒に、C校では全生徒に自習室の利用を義務づけている。これらの自習室は、C校、D校の場合は教員が輪番で監督を担当している。A校、B校については監督についての言及がなかったが、自習室には、何らかの形で監督者がついていると考えてよさそうだ。今回の調査では市内の民間自習室利用について言及した学校がなく、2002年頃には盛んに行われていた民間自習室の役割を、学校が肩代わりしている状況がうかがえた。調査対象校の自習室利用の状況から、韓国では修能試験に備えて夜、学校で学ぶのは、地域を問わず生徒の一般的な習慣だと思われる。自習室の利用時間から推定すると、韓国の高校生は、平均4～5時間程度は、自習室またはそれに相当する場所で学習しているとみなすことができるであろう。

### D. 生徒の教室外での英語使用経験について

生徒が教室外で実際に英語を使った経験があるかどうか、またどのような英語使用経験を有しているのかについて教員に質問したところ、中学校では、教室外での英語の使用経験があったであろうが、高等学校では、インターネット検索などを除けば、教室外で生徒が英語を用いる機会はほとんどないであろうという状況が明らかになった。国策としての英語教育の柱を、コミュニケーション能力の育成としているが、会話を重視した小学校英語教育が中学校になると受動的な学習に変わることは、権(2007)の調査結果から読み取れるところであり、英語使用経験も高校生にとっては過去の経験であるという状況が判明した。

### E. 生徒の過去の英語学習（特に小学校の英語学習の効果）について

小学校で英語を履修した生徒とそれ以前の生徒が授業の中でどのように異なるか英

## 第1章 調査結果

語力と態度について教員に質問した。その答えとして、前者の生徒は、総じてオープンで臆することなく、また、積極的に発言することができるようになってきているという指摘は、全校に共通していた。しかし、小学校で学んだ英語力が高校での英語力に影響を与えているか否かについては、その差は認められないと感じていることが明らかになった。2校の教員は、小学校で英語を学んだ生徒のほうが、スピーキング能力が高いと感じていると答えているが、実際にはスピーキングは授業でほとんど指導されていないので、これも心象的な発言と解釈できるであろう。

### ③教員アンケート調査結果についての考察

#### A. 学校における英語学習に関する関連情報について

調査対象校の英語クラスの生徒数は40名を上限として、37～38名程度が平均的であったことから、韓国の高校の英語クラスの生徒数は日本のクラスとほぼ同じであると考えてよさそうだ。カリキュラムについては全般的には特に特色がないとも言えるが、修能試験対策という、表にはどこにも掲げられていないカリキュラムがあると考えてよいようである。韓国の学校英語教育の目標はコミュニケーション能力の育成であるが、スピーキングとライティングについては教科書で扱っていても指導しないという点で、理想と現実に大きなギャップがあることになる。しかし、リーディングとリスニングの指導については、実際にその力がつくように指導されていることは、緑川(2004)が指摘している。インタビュー調査でもアンケート調査でも英語授業の特徴は修能試験重視であることが明らかになる一方で、インタビューと授業見学によって、修能試験のための英語指導は知識のみを詰め込むようなものではないことが確認できた。

習熟度別授業(水準別授業)は、現行の指導要領(第7次教育課程)の柱のひとつである。これによれば、小学校から高等学校まで、2レベルから5レベルまでの間で、学校の事情にあわせて習熟度別クラスを編成することになっている。調査対象校の教員の説明から、習熟度によって教材や指導法を変えることも明らかになった。すなわち、上級クラスでは、授業での英語使用、副教材の多用等の実態があり、初級クラスでは、教科書のみを用いて丁寧に指導しているということである。

学校主催の海外研修や英語関係のイベントに関する質問に対する回答から、学校によっては英語のイベントが行われている状況も明らかになった。調査対象校で行われ



ていたイベントには、英語劇、スピーチ・コンテスト、単語コンテスト、リスニング・コンテスト等があり、生徒は、英語劇やスピーチ・コンテストによって、授業外で僅かながら英語使用の経験を与えられることもあるということがわかった。また、アンケート結果から、生徒の自学自習のための施設としては、インターネット施設などを有しているところが多いであろうと推察できるが、調査対象校の中に多読用ライブラリーなどを揃えている学校はなかった。

#### B. 「生徒に養わせたい英語力」と「卒業までに到達するであろう英語力」の予測

インタビューでは、話したり書いたりすることによって自己表現能力を養わせるべきであるのに、実際には修能試験の準備でそれが不可能であると答えたすべての教員が、アンケートでは、英語授業の最重要課題は修能試験の準備であり、養わせたい英語力は読解、語彙、文法が主なもので、話す力や聞く力は、多少は養わせたい程度である、と答えている。ここから、理想より当面のニーズが、養わせたい英語力に大きな影響を与えていると判断してよいであろう。しかしながら、生徒に対して卒業までに養わせたい英語力を実際どの程度まで到達させ得るかという質問に対して、苦勞をせずに英語を駆使できる読解力やリスニング力の50～70%程度までを、卒業までに到達させ得るであろうと答えていることから、調査対象校の教員の高い成果予測に驚かされる。

緑川（2008）によれば、GTEC for STUDENTSによる今回の調査校の調査対象生徒群（1～2年生）は、その時点でリーディング力もリスニング力も日本の類似の調査対象生徒群に比べて高い習熟度に到達していた。GTEC for STUDENTSがコミュニケーション能力の到達度テストであるという特質を考えると、教員の生徒の英語力予測は的を得ていることになり、目標に向かって徹底的に指導する教員の努力と、修能試験が絶対的に必要であるという生徒や社会のニーズ、さらに膨大な学習時間によってそれが可能になっているのではないかと推測できるのである。

#### 4) 教員調査のまとめ

まず、インタビュー調査とアンケート調査を通して、調査の目的に掲げた2つ質問の答えをまとめてみよう。

第1の質問「韓国の高校生のリーディングとリスニングの能力（GTEC for STUDENTS

## 第1章 調査結果

による)が、ほぼ同年齢の日本の高校生に比べて非常に高いのはなぜか」に対する答えは、

- ・ 韓国の高校生は授業内の英語学習量が絶対的に多い可能性がある
  - 授業の中で扱う教科書の英語量が多い
  - 教科書に加えて、読解、リスニングの補助教材が用いられていることも英語学習量を増やしている
- ・ 授業以外での英語学習の絶対量も多いことが予測される
  - 生徒は修能試験で高得点を取りたいという高い動機を持って学習している
  - 授業外の補充授業によっても英語学習が進められている
  - 自習室の利用で学習内容については生徒が自律的、かつ計画的に学習を進めている
- ・ 語彙と文法、語法の徹底的な指導と学習によって、それらの知識を用いて理解できる絶対量が多いであろう

ということである。

第2の質問「韓国の高校生の日常の英語使用経験率（アンケート結果による）が日本の高校生に比べて非常に高いのはなぜか」について、教員から得た答えはかなり限定的であったが、明らかになったことは、

- ・ 日常的な英語使用経験は過去においては中学校までであり、その中では教室の中で英語の疑似体験をする活動が行われていたようだ

ということになる。

### 5) 教員調査から得る日本の高等学校英語教育改善への示唆

最後に、本調査から日本の高等学校における英語教育改善についてどのような示唆が得られるかについて記述したい。今回の調査では、インタビュー、アンケート、授業見学から、日本とはかなり異なる韓国の高等学校の英語教育の実態が明らかになった。今回の調査結果では、韓国の高校英語教員は、修能試験を目的とした英語指導をしているという状況は明白だが、このことは日本の高等学校の大学受験のための入試対策とはかなり異なることに注意を向ける必要があるようだ。韓国の修能試験は、スピーキング力は間接的にしか問わず、ライティング力はまったく問わないという問題点はあっても、リスニング力、リーディング力については、短時間で多量の情報を処理できなければ答えられないように作成されている(緑川、2002、2004)。すなわち、この試験は、リーデ

イングとリスニングについては、その能力を使って英語をどれだけ自動的に処理することができるか測定するように設計してあるので、修能試験対策は、限られた領域についてはその力が養われるように指導しているということである。

日本の入試の波及効果を研究した渡部（1997）は、日本の入試の波及効果は十分に期待できると述べ、入試問題用の練習問題の選び方、授業の方法や教員の意識改革や多様な教授法知識の必要性等について具体的な示唆を与えている（渡部、1998a、1998b）。平たく言えば、入試準備は、望ましい英語力を十分に養うことができるのであり、その鍵を握っているのは教員であるということである。韓国の高校の教科書は、受験指導のために、特にパラグラフ・リーディングと語彙・文法の指導が強化されている。教員の授業の方法説明と授業見学から、語彙や文法は読解を助けるための手段として指導されており、単独で文法指導を行うのとはまったく異なっていた。読解指導はリーディング教授法にかなり忠実で、教授法の知識が授業指導の中で十分に生かされていたとすることができる。このことは、日本の学校英語教育が改めて注目すべき点である。

韓国の高校教員はどちらかといえば、相互に連携するという意識が希薄である。日本のSELHi（文部科学省が指定するスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの略称）研究の成果の中には、シラバスや教案、教材の共有が多くの高校で報告されている。しかし、韓国ではこのような状況はほとんどないと考えてよいかもしれない。授業見学から、コンピューター技術を駆使して自分だけの教材を作り、しかも他の教材よりもさらによいものを作ることに努力を傾注しているようにみえた。このことによって、授業以外の仕事でも常に忙しい日本の高校教員の立場と、クラブ活動などの負担がなく、教科指導を十分に行える韓国の高校の教員の立場がいかに異なるものであるかを痛感した。日本の英語教育の効果が上がらないという批判は、どちらかという教員の資質にばかりに向けられやすいが、学校教育の構造上、根本的に変えなければならない改善点として、教育政策の担当者がしっかりと対策を講じるべきであると考えられる。

韓国の修能試験と日本の入試制度の違いにも注目すべきである。韓国では、大学進学希望者は例外なく修能試験を受験しなければならない。しかし、この試験は大学での修学に耐え得るかを試験によって試す目的と、高等学校までの英語学習の成果を測定する出口テストの2つの役割を果たしている。したがって試験の平均点も極めて高いという状況がある。この試験終了後に、各大学が二次試験を行うが、その内容は直接教科の学力を問う形ではなく、論述試験（小論文）、面接試験などとなっているということであ

## 第1章 調査結果

---

る。こうしてみると、入試制度のみをとっても、高等学校教育と入試に整合性があるのは韓国のほうであるとみることができる。日本では大学全入時代を迎えても、有名校には入試競争があり、高等学校には依然として従来型の入試向け教育が残るとすれば、大学全入が教育の質の低下を生むだけとなる。制度上の問題として解決が急務である。

次に、韓国の修能試験が将来的に大きく変わり、その影響で英語授業も大きく変わるときが、そう遠くはないかもしれないということにも注意を払うべきである。韓国ではコミュニケーション能力育成を目指す英語教育という国家的目標があるにもかかわらず、修能試験の影響で高校生が英語を使う機会が極端に少ないという実態は、既に、英語教育の重大な欠陥として国家的な問題とされている。過去の東アジア調査でも韓国の生徒のライティング力養成の必要が指摘されているが（権、2004）、本調査の韓国側研究者である権教授によると、実際にそのようなことが起きるかどうかはわからないが、韓国では修能試験にライティング、および、スピーキング・テストを加えることについても、国家のレベルで検討され始めているということである。

最後に、小学校の英語教育の成果についてである。韓国は小学校英語教育を開始して11年が経過した。高校生の教室外の英語使用経験は過去のものであるという悲しい結果を得て、韓国の小学校英語教育10年の評価を国家レベルで行ったKwon（2007）の研究に再度注目した。Kwonは、小学校英語が高等学校の生徒のコミュニケーション能力を引き上げたと述べているが、今後の課題として問題点も提示している。今後の課題として取り上げられた項目の中に、表現力の養成の充実、小学校段階における文字教育の充実、さらに、英語だけを使うことができる施設の設置などがあった。韓国と日本が外国語としての英語教育を行っており、そこで直面する課題がいかに類似しているか改めて知るところである。また、韓国の小学校英語教育の今後の課題からは、これから日本で本格的に始まろうとしている小学校の外国語教育（正式名称は「外国語活動」）を、日本の英語教育システムの中でどのように生かしていくべきかについての有益な示唆を得ることができる。

## ＜参考文献＞

- 権 五良 (Oryang Kwon) (2004) 「韓国の教育事情から見た韓中日英語力調査の解析と考察」ベネッセコーポレーション (編) 『東アジア高校英語教育調査：指導と成果の検証』 (株) ベネッセコーポレーション
- Kwon, Oryang (2007) *Impacts and Effects of Ten Years of Elementary School English Education in Korea* Benesse教育研究開発センター 『東アジア高校英語教育GTEC調査2006 報告書』 (株) ベネッセコーポレーション
- 権 五良 (Oryang Kwon、研究責任者) 他 (2007) 『小学校の英語教育10年の成果分析による小・中学校英語教育の活性化方案模索』 大韓民国教育人的資源部 (株) ベネッセコーポレーション 翻訳
- 緑川日出子 (2002) 「韓国大学修学能力試験概観」 『Unicorn Journal』 53. 文英堂
- 緑川日出子 (2004) 「韓国大学入試に学ぶ：リスニング・テストの最新情報」 『Unicorn Journal』 58. 文英堂
- 緑川日出子 (2008) 「『英語力』と『日常の英語使用に関する意識』の比較研究 (日本・韓国) ～そこから読み取れる日本の英語教育改善への示唆」 Benesse教育研究開発センター 『東アジア高校英語教育GTEC調査2006 報告書 (改訂版)』 (株) ベネッセコーポレーション
- 渡部良典 (1997) 「入試が悪いという前に—入試英語を生かすための授業に向けての提案」 ASTE Newsletter 37. pp.1-8
- 渡部良典 (1998a) 「大学入試の波及効果—授業研究から考察する(上)」 『英語教育』 1. pp.68-71 大修館書店
- 渡部良典 (1998b) 「大学入試の波及効果—授業研究から考察する(下)」 『英語教育』 2. pp.68-71 大修館書店